

## 第2章

# ラジオスタジオ内における相互行為分析

## —チーフアナウンサーの二重性を中心として—

人間班

### 0. はじめに

私たちはビデオを分析していて、チーフアナウンサー I<sup>(1)</sup> が他の参加者と比べて何か特別な人ではないかという疑問を持った。スタジオ内には I を含め三人のアナウンサーがいるが、I だけが他の二人と立場上、違って見えたのである。具体的に言うと、後に出てくる無音区間での G に対する I のうなずき (第2節) や、ゲストの話に受け手として参加しつつ、視線を様々なところに移動させていること (第3節) である。その様子は、スタジオ内のアナウンサーの一人としてのみ存在しているようには見えない。もしかすると、I はもう一つ別の、もしくは複数の参加の仕方をしているのではないだろうか。つまり、I は立場上二重性を帯びていると言えるかもしれない。この論文では、この I の二重性を解き明かしていこうと思う。

「参加者の相互行為において、視線がある役割を果たしていることは常識的に知られている」[皆川, 1993:56] と皆川も言うように、このことは、私たちのビデオ分析についても同様のことが言え、参加者の視線を見ていく作業が重要となった。参加者たちは、発話や、言葉を用いない振る舞いをその場に合わせて「デザイン」しながら、相互行為を達成している [cf. 西阪, 1997:22]。私たちは撮影したデータから分析のためにいくつかの場面を抜き出し、視線やうなずきを含めた会話記録 (トランスクリプト) を作成した。この論文の分析は、トランスクリプトに基づいている<sup>(2)</sup>。

また、ラジオ放送は、大きく分けて三つの編成から成り立っている。それは、録音素材を用いた部分と、会話的相互作用が複数人でなされている部分と、一人でなされている部分である。ラジオ放送は、実は録音素材を大量に組み込んで番組づくりを行っている。それ自身、重要な研究テーマとなるが、当面、録音素材には触れないことにする。

私たちは上記で述べた、複数人による言語的相互作用がなされている場合を「会話的編成」、一人でなされている場合を「非会話的編成」と名付けることにする。私たちはこの枠組みの中で、スタジオ内の相互行為分析を、I の二重性がどのように表れているかを中心に次節から見えていくことにする。

### 1. I と D の関係

I と D (ディレクター) の関係について、D はインタビューで「スタジオの進行はおおむね I がやっており、時間調整も I が冷静に見ている」[荒木・藤井・李, 1998:] と答えている。D が I に依存していることを以下に示す。

1997年7月6日の放送では、D がスタジオ内に指示を出すのに用いるモニター<sup>(3)</sup>

が故障して使えなくなったので、その代わりにスケッチブックでガラス越しに指示を出すことになった。CM中にDがスタジオ内に入ってきて、そのことをIに伝えた。



図1 スケッチブックの使用をIに伝えるD (9:23'13")

図1を見ると、DはIに向かって指示を出している。これは、スタジオ内でIがある特別な役割を担っていると、Dが考えているからであろう。しかもそれは、時間と深く関係するものではないだろうか。

Dは、Qシート<sup>(4)</sup>を作成することにより番組の流れを管理し、モニターを使って曲をとばす、コーナーをまとめる、などの指示を出すことによって大まかな時間管理をしている。だが、Dは調整室(スタジオ外部)にいるため、指示はできるが、実際に会話を始めさせる、コーナーを終わらせるという行為自体は行うことができない。そもそも会話とは単独に終了させることはできない。会話の終了は相互行為の中で達成されているのである。しかし、会話の終了のきっかけは、誰かによって作られなければならない。スタジオ内部にいないDには会話終了のきっかけを作ることすらできない。そのため、スタジオ内にいる者のうちの誰かが、コーナーを始めさせたり、終わらせたりすることが必要となる。そのきっかけ作りを担っているのが、Iと言える。最終的には、Iが会話の終了を先導している。(第Ⅲ部付録第1章トランスクリプト例のコーナーの終了部分を参照)

Iは、番組の中で一つ一つの細かい時間管理(話を終わらせる、曲紹介にもっていくなど)を行う。Dは、番組全体の大まかな時間管理を行っている。すなわち、IとDが相互的に時間管理を行うことで、番組進行が成し遂げられていると言えよう。

また、Dの時間管理の仕方に注目すると、モニターを使っての指示、Qシートの作成などである。前にも述べたように放送中のスタジオ内には、会話的編成と非会話的編成があるが、Dはそのどちらに対しても違いはなく、単一的な時間管理の仕方をしている。一方Iは、会話的編成と非会話的編成の場合では、他の参与者との関わりに違いが見られた。次節からその点についてみていこう。

## 2. IとGの関係

この場面は、Gが「ウィークリーインフォメーション」というコーナーの原稿を読み終





図2 IとGの無言の確認 (カメラII) (10:54'58")



図3 IとGの無言の確認 (カメラI) (10:54'58")







PPPPPPPPPPPP,, SSSSSSSSS,, PPPPPPP,, IIII  
Y:あの残酷な// まあそれがきっかけであの: :

.. PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,, MM,, PPPP  
I: //ひhひhひhひh

YYYY,,... PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,,... YYYYYYYYYYYYYY  
S: //いやでしょう//ね

---

IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII  
Y:出家しましてね// その祇王は//

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP  
I: //ええ //ええ

YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY  
S:

---

<断片3>は、(9:57'20"~9:57'43")の断片である。10時ちょうどの「そごう」の時報までに、コーナーを終えて、曲紹介をし、曲を流さなくてはならない<sup>(14)</sup>。曲紹介と曲を流すのには約1分40秒必要である。したがって、9:58'20"ごろにはコーナーを終えなければならない。しかし、この時Yは、平家物語に出てくる女性には、強いタイプと弱いタイプの二つのタイプがあって、それぞれに当てはまるのが巴御前と、清盛にもてあそばれた祇王や仏である、という話をしている。これは、歴史的事実を述べているにすぎない。物語を語ろうとするとき、その終わりには「おち」があることが前提であることを考慮するなら、Yの話が終了に向かっていないのは明らかである。

ここでのIは<断片2>と比べて、受け手性の表示の一つである相づち、うなずきなどの回数が減っている。その上、時々なされる相づちは、Sアナウンサーの声に反応するもので、遅れてなされている。このように考えると、Iの受け手性の表示は片手間のように見え、この場面にIが十全に参加していないことの表れであると言えよう。これは、おそらくはIの二重性のためであり、ここでは二重性のもう一方の時間管理の方に重点が置かれているのである。

また、このコーナーのような「会話的編成」の場面は、第2節で挙げた「非会話的編成」の場面と違い、言葉を用いて自らが終了のきっかけを与えることが可能である。第2節、第3節から、Iの時間管理はDと異なり、単一ではなく、それぞれの場面の編成に対応するように工夫されていることがわかる。

### 3-2. SとY、IとS

一方、SとY、IとSの関係はどうであろうか(SとY、IとSの位置関係については、第I部配置図を見よ)。再び<断片3>のトランスクリプトを分析すると、SはYに視線を向けていることが多い。Sが原稿を見るのは、Yが下を向いて原稿を見ると、自分





この場面は、Sが担当のコーナーであるため、Iが何か指示を与えるにしても、それを音声で行うことはできない。そのためIは、音声以外のやり方、つまり指で「巻き」の合図を出すことによってSに指示を与えたのである。これは、IとSの仕事の内容の違いから生じた、と考えられる。その違いとは、Iがラジオ番組を進めていく上でスタジオ内のアナウンサーの一人としてだけではなく、時間を管理するという役割も担っているということである。すなわち、Iが立場上、二重性をもっていることの表れであると言えよう。

#### 4. まとめ

本章では、ラジオ番組を進行させる上での相互行為場面を示してきた。ラジオスタジオでは、リスナーには知られない様々なやり方を用いて番組を進めている。リスナーはラジオ番組という、いわば「作品」を聞かされている。ラジオスタジオに携わっている参加者は、リスナーに対し、常に最高の「作品」を提供するために、手間と隙をかけている。だが、それらをリスナーに知らせることなく習熟したやり方を用いて放送を行っている。例えば、IがSに「巻き」の合図を出すこと（第3節）。また、IとGの無音区間における無言の確認（第2節）がそれである。

特に、後者においては、たった3秒という短い無音区間の中で高速にコミュニケーションされており、しかも不自然な沈黙には見えず、リスナーが特に注意を寄せる部分にはなっていない。

Iはウィークリーインフォメーションが終わる前から、様々な所に視線を移している。特に、Gの原稿とモニターを見る時間が増え、残りの時間とGの残りの原稿量を気にしていることが明らかに分かる。GもIを直接見てはいないが、Iの視線の移動は、Gの体の向きから見て、理解されていたはずだ。だからこそ、Iに確認を求め、IもGの意図していることを理解していたので、うなずいて、予定どおりニュースを読んでも良い、という旨を伝えたのである。

しかし、Iの参与の仕方が次のような場合も考えられる。西阪はゴッフマンの議論を次のようにまとめている。

「たとえば、語られている内容に責任をもつ者であることと、その内容を音声として発する者であることは、必ずしも一致しない、という。パーティに招待するため友人に電話して『Xさんも来れるかしら？』と聞いたとき、その友人がたまたまわきにいたXのほうを向いて『〇月×日のパーティに来れる？』と言うばあい、その友人は発話者であるとしても、必ずしもその質問（もしくは招待）自体に責任をもちうる者ではない。つまり、ゴッフマンのばあい、一つの発話にたいしてさまざまな参与のあり方のあること、これが問題だった。」[西阪, 1997:18-19]

言うなれば、人の手紙を届けはするが、その内容には責任を持たない、郵便配達人のように、IがDの指示を代弁するだけの者として存在している可能性は十分あり得る。しかし、IはDの指示にアレンジを加えることもあり、Iの判断で最終的な指示が進められたと考えられる場面がいくつかある。例えば、第2節で述べたGの確認<断片1>の場合に

ついて、Dはインタビューにおいて「Iにニュースを飛ばすよう指示は与えていない」[荒木・藤井・李, 1998:]と述べている。

紙面に余裕がないのでここで詳細を述べることはできないが、同じ日の他のコーナーにおいても、Dの指示がIによってアレンジされたことがある。Dは、そのコーナーが予定の時間を過ぎていたので、早めに終わらせるために、Dはスタジオ内にメモ書きでの指示を与えた。それに対しIは、ただ曲を飛ばしただけでなく、コーナーの残り時間の編成を自分で行って、もう一人にインタビューするという自分なりの判断を付け足した。

また、データZにおいて、この日は番組中に聖火リレーの中継が入ることになっていた。Dはいつものように、外部とのやりとりが重要な仕事になっていた。この日もIとDは番組進行のための作業を共同的に行っていた。ビデオを見てみると、Dは番組のCM中に「後クレ（コーナー後の提供）行って、生CMに行きましょう。」とスタジオ内に伝え、Iはその後、「はい。」と答え、自分とGの両方に対する確認として、「先に生CM行って、時間見て、時間あったら曲に行こうか。」と発言した。そして、Dにトークバックで「時間あったら、曲にしようか。」と提案し、それにDがうなずいて、「『風のララバイ』（曲名）に行きます。」とDは答えた。このように、IはDの指示をただ単に受け取って、他の参加者に伝えるだけでなく、I自身の判断でその場を作り上げていることもある。

ところで、IとGが互いに相手の意図していることを認識するためには、二人の志向の重なりの中に、お互いが志向していることを確認しなければならない。西阪はケンドンの議論を端的に要約して、以下のように述べている。

「ケンドンは、まず『志向空間』とでも呼んだらよいようなものを定義する。つまり、ある人が何かをしようとするとき、そのために使用するべき空間が、その人の前に拡がっている。この空間の拡がりの中心角の角度・半径の長さは、そこで何がなされるかに依存せざるをえない。ものを書くときと遠方に見かけた知人に声をかけるときでは、おのずと志向空間の大きさは異なる。複数の身体が出会うとき、それらの志向空間が重なりあうときがある。」[西阪, 1992 43:63]

つまり、IとGの例で言うならば、GはIの方を振り向きIを志向できる位置にいる。そして、Iの視線はGを直接見るものではないが、Gの様子を「モニター」できる位置におり、Iの志向空間は、Gを観察できる範囲にある。それは、IとGが互いに志向できる枠組みに存在していると言えよう。

しかも、単位事項と単位事項の移行期間は、場面が緩んでいる状態なので、他への志向を表示しやすい時期である [cf.森田, 1997:119]。この場面も、コーナーとコーナーの移行部で、場面が緩んでいるため、他の行為を挿入しやすい。他の行為とは、Gが読み終わった原稿を右に移動させて、Iの方を向き、確認を求め、ニュースを読み始めようとするところを指す。このGの行為は、自然なものとして捉えることが可能であり、Iの振る舞いととも、番組進行に必要な合意を達成している。

このように、Iが自分自身をスタジオ内での番組の進行者であると感じているのに加え、スタジオ内の共演者（S、G、D）も、Iの指示を期待しているからこそ、上記のような様々な方策が可能になっているのである。換言すれば、ラジオ番組は、ラジオスタジ

オ内での相互行為連鎖を通して達成されていると言えよう。

注

- (1) この論文に登場している主なメンバーは、I (チーフアナウンサー)、S (女性アナウンサー)、G (男性アナウンサー)、W (日本気象協会の人)、Y (ゲスト)、K (コメンテーター)、D (ディレクター) である。データXの配置図を参照。
- (2) トランスクリプト記号については第I部記号一覧を参照
- (3) スタジオ内には、モニターと呼ばれる小型画面のテレビが二台設置されており、一台は、ディレクターがスタジオ内に指示を出すための道具 (モニターI)、そしてもう一台は、番組のプログラムが映し出されている (モニターII)。この番組においては、調整室にいるディレクターが、指示を紙に書き、それをCCDカメラで撮って、スタジオ内の小型画面に映し出し、スタジオ内にいるアナウンサーに指示を伝えるという方法を用いている。データXにおいては、モニターIは故障していた。
- (4) ラジオ放送においては、Qシートという番組進行表にのっとり、番組を進めていく。この番組においては、Dが作成している。何分からそのコーナーが始まるか、CMを何秒流すか、等が記号を用いて示されている。前提として、この情報は番組関係者 (アナウンサー、ディレクター、機械を操作する人、コメンテーター、ゲスト、アシスタント) に共有されている。次に、Qシートの一例をしめす。

9:00	T M & B G 前 T M	DF▼ DF▼	3' 00"	★THIS MORNINGS NEWS HEADLINE ★ あいさつ G アナ、中国から帰国！スタジオ見学者もたくさんいます！ 今日のラインナップ コメンテーター紹介：徳島大学総合科学部 K さん
	T M & B G 後 C M B G	DF▼ TEL AF	3' 00" ' 40"	★WEATHER INFORMATION ★ 日本気象協会 ( W さん )
	後 C M B G	DF▼ AF DF▼	' 15"	★海上気象情報 ( 提供：四国マリーナ ) ( 後ワクあけ ) 今週のニュースを振り返りましょう・・・

- (5) 第I部のQシート参照
- (6) 配置図+記号一覧は第I部にのっているので参照
- (7) 以下にニュースの原稿の一例を示す。ニュースの原稿はこのように読みやすいように作成されている。

共A3東013一般02R③完①  
◎プノンペン内戦状態に  
邦人巻き込まれ重体

---

共同通信によりますと、  
カンボジアできのう、  
ラナリット第1首相派と、  
フン・セン第2首相派の兵士らの間で

銃撃戦となり

首都ブノンベンは内戦状態に

なっています。

この銃撃戦で兵士や市民ら30人が死亡、  
35人がけがをしました。

また、日本の企業の

「オリエンタルコンサルタンツ」の

(続) (H) (11) 970706 0039 131字

共A3東014一般02R③完②

ブノンベン事務所にロケット弾が

撃ち込まれ、

事務所長の岡島隆正

(おかじま・たかまさ)さん38歳が

病院に運ばれましたが、

意識不明の重体になっています。

交戦はブノンベンと近郊の4カ所であり、

ブノンベン西部にあるラナリット派の

政府軍副参謀総長や

軍高官などの自宅が攻撃されました。

このためブノンベン市当局は夕方、

昨夜10時からきょう午前6時間での

外出禁止令を出しました。

(続) (H) (13) 970706 0039 178字

共A3東015一般02R③完③

また、銃撃戦の影響で

ポチェントン国際空港が事実上

閉鎖されました。

ブノンベン市内は、

装甲車も出動するなど

緊迫した状況が続いています。

(了) (H) (06) 970706 0039 65字

※なお、本来の原稿は縦書きである。

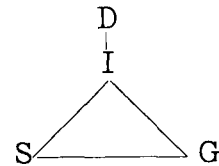
(8) 第I部配置図参照

(9) 調整室とスタジオの音声による交流装置。ディレクターは調整室のボタンを押すことによって、オンエア中であっても、リスナーに聞かれずに自らの指示をアナ

ウンサーに伝えることができる。逆にアナウンサーも音声をディレクターに伝えることができるが、これはスタジオ内の音声がオンエアされていないときに限る。録音素材（曲、録音したインタビュー、など）やCM中はスピーカー、それ以外ではアナウンサーがつけているイヤホンにディレクターの声が流れる。

(10) マイクの音量を調節するレバー。カフを上げると音量が大きくなり、カフを下げると音量は小さくなる。

(11) 右図のように、IとDの合意済みの情報がSとGに流れてくる仕組みになっているので、Iに従うことが最終決定に従っていることになる。



(12) カメラアングルの影響で、Yの視線を捉えることはできなかった。

(13) 注(3)を見よ。

(14) Gアナ、Kディレクターはインタビューで、曲をとばすこともあると述べているが、曲はとばさないのが基本である。

(15) 人差し指を立てて、それを回し、話を早く終わらせることを促す行為のこと。ここでは、IがSに対して行ったことを指す。

#### 参考文献

- 荒木・藤井・李, 1998, 「Kディレクターへのインタビュー」『ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書』付録第2章。
- 荒木・藤井・李, 1998, 「Gアナへのインタビュー」『ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書』付録第2章。
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男, 1997, 「救急医療現場の社会的な組織化」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 168-185。
- 小林康夫・船曳建夫 編, 1994, 『知の技法』東京大学出版会。
- 皆川満寿美, 1993, 「『無関与』の協同的達成」『現代社会理論研究』3: 47-67。
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 99-122。
- 西阪仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』169: 58-73。
- 西阪仰, 1995, 「〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」『言語』24(7 ~ 12)
- 西阪仰, 1997a, 「会話分析に何ができるか—社会秩序の問題をめぐる—」『社会学になにができるか』八千代出版: 115-154。
- 西阪仰, 1997b, 「語る身体・見る身体」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 3-29。
- 日本民間放送連盟編, 1997, 『放送ハンドブック(新版)』東洋経済新報社。
- Schegloff, E. A. and H. Sacks, 1972, "Opening up closing" *Semiotica* 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社: 174-241。
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正, 1993, 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力」『社会学評論』173: 30-45。